

ねん がつ にち
2022年5月15日

ふっかつせつだい ごしゅじつ
復活節第五主日

きくち いさおだい しきょう
菊地 功大司教 メッセージ

5月^がは聖母^{せいぼ}の月^{つき}です。5月^が13日^{にち}はファティマの聖母^{せいぼ}の記念日^{きねんび}でしたが、10月^がとともに5月^がには、聖母^{せいぼ}の取り次^とぎを願^{ねが}って、ロザリオの祈^{いの}りをささげ^{すす}るように勧め^{すす}られています。

特に^{とく}2020年^{ねん}以来^{らい}、感染症^{かんせんしょう}の困難^{こんなん}によっていのちの危機^{きき}に直面^{ちよくめん}する中で、教皇^{なか}様^{きょうこうさま}はしばしば、聖母^{せいぼ}の取り次^とぎ願^{ねが}って祈^{いの}りをささげ^{すす}るようにと、わたしたちを招^{まね}かれています。

2020年^{ねん}4月^が26日^{にち}には、「この試練^{しれん}のときを信仰^{しんこう}と希望^{きぼう}をもって乗り越^のえられるよう、聖母^{せいぼ}マリア^{たす}が助^{たす}けてくださいます」とアレルヤの祈^{いの}りの時^{とき}に述^のべて、五月^{ごがつちゅう}中にロザリオの祈^{いの}りを唱^{とな}えるようにと招^{まね}かれました。その上^{うえ}で、すべての信徒^{しんと}に手紙^{てがみ}を送^{おく}り、そこにこう記^{しる}されています。

「五月^{ごがつ}は、神^{かみ}の民^{たみ}がとりわけ熱心^{ねっしん}におとめマリアへの愛^{あい}と崇敬^{すうけい}を表^{あらわ}す月^{つき}です。五月^{ごがつ}には家庭^{かてい}で家族^{かぞくいっしょ}一緒にロザリオの祈^{いの}りを唱^{とな}える伝統^{でんどう}があります。感染症^{かんせんしょう}の大流行^{だいいりゅうこう}によるさまざまな制約^{せいやく}の結果^{けつか}、わたしたちはこの「家庭^{かてい}で祈^{いの}る」という側面^{そくめん}がなおさら大切^{たいせつ}であることを、霊^{れいてき}的な観^{かん}点^{てん}からも知^しることになりました。

そこで、わたしはこの五月^{ごがつ}に、家庭^{かてい}でロザリオの祈^{いの}りを唱^{とな}えるすばらしさを再発見^{さいはつけん}するよう皆さんにお勧め^{すす}したいと思^{おも}ったのです。だれかと一緒に唱^{いっしょ}えることも、独^{ひと}りで唱^{とな}えることも、どちらの機^き会^{かい}も最大限^{さいだいげん}に活^{かつ}用^{よう}して、状^{じょう}況^{きょう}に應^{おう}じて決^きめることができます。」

加^{くわ}えて今年^{ことし}、感染症^{かんせんしょう}の状^{じょう}況^{きょう}が終^{しゅう}息^{そく}にまだ向^むかわない中で、わたしたちは今^{なか}度は戦^{こん}争^どの危^{せい}機^きに直^{ちよくめん}面^{めん}しました。ウクライナへのロシアによる武^{ぶり}力^{りよく}侵^{しん}攻^{こう}という暴^{ぼう}挙^{ぎょ}の中で、多^{おほ}くの人^{ひと}がいのちを暴^{ぼう}力^{りよく}的に奪^{うば}われる事^じ態^{たい}を目^まの当^あたりにして、教皇^{きょうこう}様^{さま}は聖母^{せいぼ}への祈^{いの}りを強^{つよ}めるようによ^よびかけられました。

1965年^{ねん}、特^{とく}に世界^{せかい}平和^{へい}のために聖母^{せいぼ}の取り次^とぎを祈^{いの}ってほしいと、教皇^{きょうこう}パウロ六^{ろく}世^{せい}は呼^よ

びかけました。回勅「メンセ・マイオ」で、教皇は5月にロザリオの祈りをささげる伝統について、「五月は、より頻繁で熱心な祈りのための力強い励ましであり、わたしたちの願いがよりたやすくマリアのあわれみ深い心に近づく道を見いだすときです。教会の必要が求めるときに、あるいは人類が何か重大な危機に脅かされているときにはいつでも、キリスト者に公の祈りをささげるよう勧めるためこのマリアにささげられた月を選ぶのは、わたしの先任者たちに好まれた習慣でした」と述べています。(3)

感染症の状況と戦争の脅威の中に生きるとき、ヨハネ福音に記された主イエスの言葉が、心に強く響き渡ります。

「互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなた方がわたしの弟子であることを、皆が知るようになる」

愛し合うためには、互いの存在を受け入れることが必要です。いのちの危機の中で、自己防衛の思いは、どうしても人間を利己的にしてしまいます。異質なものへの拒否感と排除の感情を強めます。個人のレベルでも、共同体のレベルでも、国家のレベルでも、自分を守ろうとするとき、わたしたちは排他的になってしまいます。だからこそいま、「互いに愛し合いなさい」という言葉が必要です。互いに心を開き、耳を傾けあい、支え合う連帯こそが、この状況から抜け出すために不可欠だと、教皇フランシスコはたびたび繰り返されます。福音を広く告げしらせることを第一の責務だと考えるのであれば、わたしたちは、互いに愛し合うために、心を開く必要があります。